

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：34315
 研究種目：若手研究
 研究期間：2018～2022
 課題番号：18K12993
 研究課題名（和文）認知症家族介護者の健康および介護環境に対するセルフコーピングの支援ツール開発

 研究課題名（英文）Development of self-coping support tool for dementia family caregivers' well-being and caregiving environment

 研究代表者
 清家 理（SEIKE, AYA）

 立命館大学・スポーツ健康科学部・教授

 研究者番号：90626061
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：介護者が介護状況（客観的・主観的）を把握でき、状況に応じた対処について、自ら実施するもの、専門職に委ねるものと判断・行動の指針が示され、判断・行動の結果を確認できる指標が求められる。そのため本研究の目的は、認知症の人の介護者の内面（身体的・心理的状況）、外的（社会的状況）の二側面から、介護者の状況を包括的に把握でき、かつ自身の対処行動を図る目安になる測定ツールの開発とした。本研究では、新尺度full ver.の外的妥当性・再現性の検証、新尺度short ver.の外的妥当性・再現性の検証を実施し、再現性の確認を終えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
 認知症の介護現場では介護専門職の離職が続き、家族介護者のあらゆる課題に懇切丁寧に関わることが難しい状況にある。専門性の高さが要求される部分に焦点化して専門職が関わる形式が最善である。そのためには、まず介護者が自らの介護状況（客観的・主観的）を把握でき、状況に応じた対処（コーピング）について、自ら実施するもの、専門職に委ねるものと判断・行動の指針が示され、判断・行動の結果をも確認できる指標が必要である。学術的には、包括的に介護者の状況を把握でき、かつ支援の介入指針になりうる尺度の開発は希少と言える。

研究成果の概要（英文）：There is a need for indicators that allow caregivers to understand their caregiving situation, both objectively and subjectively. These indicators should provide guidance for decision-making and actions related to coping with their situation. They should also inform whether these actions should be implemented independently or by professionals, and allow for confirmation of the results of their judgments and actions. Therefore, the purpose of this study was to develop a measurement tool that can comprehensively assess the situation of caregivers for individuals with dementia from two perspectives: internal (physical and psychological state) and external (social circumstances).

In this study, we validated (1) the external validity and reproducibility of the new comprehensive scale, and (2) the external validity and reproducibility of the new abbreviated scale, concluding the verification process for the new abbreviated scale's reproducibility.

研究分野：社会福祉学

キーワード：認知症 介護者 Well-being 包括的 介護環境 介護コンディション

1. 研究開始当初の背景

認知症家族介護者を対象とし、かつ介護者自身が使える測定ツールの新規開発の必要性は、学術的背景、社会的背景の二側面から挙げられる。

まず学術的背景として、介護者の負担軽減を目指した介入研究のアウトカム測定ツールとして多用されている Zarit Burden Interview(以下、ZBI)が三つの課題を有する点が挙げられる。第一に、測定している介護者の負担感が、主観的か客観的か不明瞭という批判がある(新名・1989, 松田・2000)。第二に、介護者の負担感だけを測定することの批判である。ZBI に対する批判を受け、ストレス認知理論をベースにした客観的負担感尺度開発(新名・1989) 介護バーンアウト尺度の概念をスケール化した主観的負担感研究(中谷・1992)が開発された。しかし、認知症介護者の介護負担感が多角的であること(Kamiya,2014) 認知症の症状に伴う介護は複雑系であること(SPRINGER,D.1985)から、負担感・不安など負の感情だけではなく、介護における喜びや満足感、介護者と要介護者・地域住民等の人間関係の質など肯定的な側面を測定する必要性が挙げられた(Prick AE, 2016)。そして第三に、測定結果が介護者に還元されにくい点である。既存のZBIはカットオフ値がないので、得点による介護者の状況把握はできない。また測定した時点の合計点を以前の合計点と比較することで増減が分かるのみで、結果から具体的な支援等の対処を導き出せるツールではない。つまり、研究対象者である介護者に何か恩恵がもたらされるわけではない。

次に社会的背景として、介護専門職の高い離職率に伴い、専門性の高さが要求される介入の迅速な見極め、介護者による介護状況のふりかえりや支援を要する状況の見極めが非常に重要であることが挙げられる。

以上により、ZBIに代わり、介護者が自らの介護状況を簡便に把握でき、状況に応じた対処(コーピング)について、自ら実施するもの、専門職に委ねるものと判断・行動の指針が示され、判断・行動の結果をも確認できるツールが必要だと考えられた。

2. 研究の目的

(1) 目的

本研究では、認知症の人の家族介護者(以下、介護者)の介護環境(内的:身体的・心理的・精神的状態、外的:親族、近隣住民、専門職等の人間関係を基軸にした社会関係性の状態)を介護者がセルフチェックでき、かつ認知症の特性も考慮されたツールとして、認知症介護コンディション評価スケールの開発を研究目的とした。

(2) 予想される医学上の貢献及び意義

本研究で、認知症介護コンディション評価スケールの外的妥当性及び再現性が確認された後、本ツールを活用する利点として、介護者が自己対処できる部分やサポートを要する部分の見極め、自身の対処行動や支援利用の結果を視覚的に捉える簡便性が挙げられる。また専門職にとっても、専門性を以て対応すべき点を特化しやすい点、介入の結果が確認しやすい点が意義と考えられる。つまり、本ツールによる測定結果で介護者、専門職双方の行動指針を示せる点が迅速な支援介入にもなり、介護者、専門職双方ともに燃え尽き予防、ひいてはWell-beingの実現に貢献できると考えられた。

3. 研究の方法

本研究では、1：新尺度 full ver. (44 項目) の外的妥当性・再現性の検証、2：新尺度 full ver. の外的妥当性の検証結果を用いて、short ver. (13 項目) の内的妥当性を検証した。そして、3：新尺度 Short ver. (13 項目) の外的妥当性・再現性の検証を実施した。

4. 研究成果

(1) 新尺度の試作化

まず、認知症家族介護者を対象に、認知症や介護者に対する喜怒哀楽のエピソード(半構造化面接：内容分析) 主観的負担感(半構造化面接：内容分析・J-ZBI：統計解析による測定)の1年後の転帰を追い、J-ZBI スコアの変化と逆の変化(J-ZBI スコアが増加かつ肯定的語りが減少もしくは、J-ZBI スコアが減少かつ否定的語りが増加) ^注を見せた介護者の語りのカテゴリーをピックアップし、82 項目で構成されるツールの試作をおこなった。そして、試作ツール(82 項目)の内的妥当性の評価後、11 因子が抽出され、各因子から因子負荷量が高い項目を4点ずつ選択した結果、項目数は44 となった(一貫性の検証結果：クロンバック α : 0.811)。

^注：半構造化面接の結果、内容分析を実施し、データの切片化を実施した。切片化したデータをカテゴリー化し、さらに各カテゴリーをポジティブ・ネガティブに二分化したものへの該当率とJ-ZBI スコアの相関を見た結果、逆さ現象が生じていた。つまり、1年後の転帰でZBI スコアが減少している場合、これは主観的負担感が減少している望ましい結果であるため、介護者の語りもポジティブな要素が多いと予測される。しかし、分析の結果、ZBI スコアの転帰が増加している場合に、ポジティブな発語が多く、ZBI スコアの転帰が減少している場合にネガティブな発語が多い状況であった。

(2) 新尺度 full ver. の外的妥当性および再現性検証

初回調査および2週間後の再調査に参加した者110名のうち、データ欠損がない者104名(94.5%)を分析対象とした。まず、新尺度合計スコアと既存尺度の相関分析による妥当性評価を実施した結果、外的妥当性、再現性評価ともに、CES-D、介護評価(否定的)、J-ZBI で相関(いずれも $r = 0.45$ 以上)が確認された。クロンバック α による内的整合性評価では、外的妥当性：0.861、再現性評価：0.887であった。また再テスト法による再現性評価(級内相関係数)では、0.866であった。

(3) 新尺度 short ver. の試作化および内的妥当性の検証

試作化および内的妥当性の検証には、1の外的妥当性の検証結果を用いた。各設問に対して、Kaiser の正規化を伴うプロマックス回転法を用いた因子分析を行った。この時、因子抽出法は主因子法を採用した。その結果、13 因子が抽出され、短縮版の構成候補となった(クロンバック α による内的整合性評価：0.570)。

(4) 新尺度 short ver. の外的妥当性・再現性の検証

(3)の結果を踏まえ、13 項目で構成される新尺度 short ver. の外的妥当性・再現性検証研究を実施した。国立長寿医療研究センターもの忘れセンター外来通院中の軽度認知障害(MCI)の人および認知症の人を在宅介護中の家族100名を研究対象としてリクルー

トを開始し、90 名(目標サンプル数 90%到達)からデータを得た。合計スコアと既存尺度の相関分析による妥当性評価を実施した結果、外的妥当性、再現性評価ともに、CES-D、介護評価(否定的)、J-ZBI で相関(いずれも $r = 0.45$ 以上)が確認された。クロンバックによる内的整合性評価では、外的妥当性、再現性評価は共に 0.8 以上であった。また再テスト法による再現性評価(級内相関係数)では、0.866 であった。

以上により、1:新尺度 full ver.(44 項目)の外的妥当性・再現性の検証、2:新尺度 full ver.の外的妥当性の検証結果を用いて、short ver.(13 項目)の内的妥当性を検証した。そして、3:新尺度 Short ver.(13 項目)の外的妥当性・再現性の検証まで無事終了した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 11件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 M. KOMORI, K.TAKEMURA, Y.MINOURA, A.UCHIDA, R. IIDA, A.SEIKE and Y.UCHIDA | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 Relationship Between Multiple-Layered Social Networks and Pro-Community Attitudes in a Farming Community | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 Human Communication Group Symposium proceedings paper | 6. 最初と最後の頁 353-362 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 M. KOMORI, K.TAKEMURA, Y.MINOURA, A.UCHIDA, R. IIDA, A.SEIKE and Y.UCHIDA | 4. 巻 5 |
| 2. 論文標題 Extracting multiple layers of social networks through a 7-month survey using a wearable device: a case study from a farming community in Japan | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 J Comput Soc Sc | 6. 最初と最後の頁 1069-1094 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s42001-022-00162-y | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 Seike Aya, Sumigaki Chieko, Takeuchi Sayaka, Hagihara Junko, Takeda Akinori, Becker Carl, Toba Kenji, Sakurai Takashi | 4. 巻 21 |
| 2. 論文標題 Efficacy of group based multi component psycho education for caregivers of people with dementia: A randomized controlled study | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Geriatrics & Gerontology International | 6. 最初と最後の頁 561-567 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/ggi.14175 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 Seike Aya | 4. 巻 58 |
| 2. 論文標題 How can the well-being of family caregivers of people with dementia be identified? | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Nippon Ronen Igakkai Zasshi. Japanese Journal of Geriatrics | 6. 最初と最後の頁 353-362 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3143/geriatrics.58.353 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 清家 理 | 4. 巻 4 |
| 2. 論文標題 地域で支える取り組み・連携 - 治し・支える医療にむけて | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 生活習慣病と健康長寿・フレイル対策・先端医学社 | 6. 最初と最後の頁 125-131 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------|
| 1. 著者名 Aya Seike et.al | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 Effectiveness of Group-based Education for Informal Caregivers of People with Dementia in Japan: a randomized controlled study (In press) | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Geriatric and Gerontology International | 6. 最初と最後の頁 0-0 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 Aya Seike, S.Takeuchi | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 Team work skills | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Self-management: For Individual and Organizational Success | 6. 最初と最後の頁 25-37 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 Aya Seike | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 Self-awareness | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Self-management: For Individual and Organizational Success | 6. 最初と最後の頁 89-100 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 竹内さやか、清家理 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 ご家族のケア | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 認知症サポート医・認知症初期集中支援チームのための認知症診療実践テキスト | 6. 最初と最後の頁 137-139 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 清家 理 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 相談を通じた治療・ケアへの参画 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 認知症サポート医・認知症初期集中支援チームのための認知症診療実践テキスト | 6. 最初と最後の頁 171-173 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 清家 理 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 家族介護者の学びあいを通じた治療・ケアへの参画：家族教室 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 認知症サポート医・認知症初期集中支援チームのための認知症診療実践テキスト | 6. 最初と最後の頁 174-177 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 清家 理, 竹内さやか, 鳥羽研二, 櫻井 孝 | 4. 巻 16 |
| 2. 論文標題 軽度認知障害および早期認知症をもつ人への心理的アプローチによる当事者・家族介護者相互効果検証研究 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 長寿科学の最前線 | 6. 最初と最後の頁 43-51 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 清家 理, 櫻井 孝 | 4. 巻 101 |
| 2. 論文標題 認知症の家族教室 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 治療 | 6. 最初と最後の頁 1179-1183 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 竹内さやか, 萩原淳子, 猪口里永子, 遠藤英俊, 清家 理 | 4. 巻 101 |
| 2. 論文標題 パーソンセンタードケア | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 治療 | 6. 最初と最後の頁 1208-1212 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 清家 理 | 4. 巻 147(2) |
| 2. 論文標題 家族介護者の支援：家族介護者の心理教育 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 日本医師会雑誌：認知症トータルケア | 6. 最初と最後の頁 272-274 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 1件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 小森政嗣, 竹村幸祐, 箕浦有希久, 打田篤彦, 飯田梨乃, 清家 理, 内田由紀子 |
| 2. 発表標題 ある農村地域における多層的な社会ネットワークと向コミュニティ態度の関係 |
| 3. 学会等名 Human Communication Groupシンポジウム |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Aya Seike |
| 2. 発表標題 Development of psycho-social support program -Challenges, Results and Future |
| 3. 学会等名 Workshop in National Sun Yat-sen Univ (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 清家 理 |
| 2. 発表標題 孤立防止のための互助・自助強化プログラム『くらしの学び庵』の試行的実施と効果検証 |
| 3. 学会等名 第9回日本サルコペニア・フレイル学会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名 清家 理 |
| 2. 発表標題 認知症家族・介護者のケア |
| 3. 学会等名 全国老人保健施設協会管理医師研修会 (招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|------------------------------|
| 1. 発表者名 清家 理 |
| 2. 発表標題 疲れない認知症家族介護者向けの教室 |
| 3. 学会等名 認知症予防学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--------------------------------|
| 1. 発表者名 清家 理 |
| 2. 発表標題 PDCAサイクルから見る認知症介護教室 |
| 3. 学会等名 認知症学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名 清家理 |
| 2. 発表標題 認知症家族・介護者のケア |
| 3. 学会等名 全国老人保健施設協会管理医師研修会（招待講演） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---------------------------------|
| 1. 発表者名 清家理 |
| 2. 発表標題 『つながり』をみなおす・みつける・つくる |
| 3. 学会等名 認知症予防フォーラム |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 清家理 |
| 2. 発表標題 今日から使える知識とワザ：認知症の人と家族の『ココロとくらしのケア』 |
| 3. 学会等名 シンポジウム：認知症をめぐる『転ばぬ先の杖』 - 認知症になる前のお話と認知症になった時のお話 |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 清家理、竹内さやか、武田章敬、櫻井孝、荒井秀典等 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 国立長寿医療研究センター | 5. 総ページ数 32 |
| 3. 書名 認知症はじめの一步：第2版 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 分担著者：清家 理 (p133 - p136)：株式会社 第一生命経済研究所、宮木 由貴子、的場 康子、稲垣 円 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 東洋経済新報社 | 5. 総ページ数 232 |
| 3. 書名 人生100年時代の「幸せ戦略」 | |

〔出願〕 計1件

| | | |
|----------------------------------|----------------------------|---------------|
| 産業財産権の名称 認知症家族介護者向け介護環境評価スケール | 発明者 清家 理, 荒井秀典, 鳥羽研二 | 権利者 同左 |
| 産業財産権の種類、番号 特許、発明届 | 出願年 2023年 | 国内・外国の別 国内 |

〔取得〕 計0件

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|